Columbia University Medical Center 見学を終えて

２００９年３月

卒後臨床研修センター所属　初期研修医２年　垣本信幸　西口毅

今回、我々２人は現地滞在４日間の予定で Columbia University Medical Center(CUMC)の施設見学をさせていただきました。当院循環器内科所属の久保隆史先生が research fellow として留学中であり、いろいろとアレンジしていただき今回の見学が実現できました。

Columbia University は、米国ニューヨーク州ニューヨーク市マンハッタンに本部を置くアメリカ合衆国の私立大学で、1754 年に設置されました。米国で６番目に古い大学で、アイビー・リーグの一校です。世界的な研究大学としてノーベル賞受賞者を多数輩出、全世界から多くの研究者、留学生が集まっています。また、CUMC は、2007 年 US News&World Report、America's Best Hospitals ランキングで総合 6 位（心臓・心臓外科部門第６位）にランクされている定評のある大学病院です。

ニューヨーク滞在は 4 日間で、見学の内容としては、心臓カテーテル検査室、エコー室の見学、CCU カンファレンス、心不全カンファレンスへの参加、米国日本人医師会会長である本間俊一教授訪問、カンファレンスへの参加。小児病院、小児心臓ICU、NICU見学をさせていただきました。

今回、アメリカと日本の医療現場での違いについて何点か気づくことがありました。例えば、カテーテル検査室についてですが、当院では循環器内科医、放射線技師、看護師により検査が遂行されます。その際、循環器内科医が検査前の点滴ライン確保、穿刺、カテーテル操作、検査後の止血、検査データの記録等をすべて行います。一方で、CUMC では、循環器内科医の依頼を受けて、穿刺、止血は専門の技術者、記録は記録担当の技術者が行い、カテーテル専門医はカテーテル操作を行うのみで、役割分担がはっきりとしており、システム化されている印象を受けました。これにより１日あたりの検査件数を多くすることが出来ている模様です。また病棟では医師と看護師の間の役割を行うスタッフがおり、検査のプランや処方薬の量を調節したりするとのことでした。直接に仕事場を見学したわけではないですが、現地で実際にその仕事をしている日本人の方に直接話を聞き、制度の違いに感心する一方で困惑していました。

一方で急性心筋梗塞等では緊急カテーテルが必要ですが、アメリカでは各部署間での患者の受け渡しに時間を要し、再潅流までの時間が長くなり日本より死亡率が高くなっているとのことで

す。全てのシステムが、日本より優れているのではなく、国民性、政治経済的背景に見合ったシステムが各国で発展し、長所短所を内包しているのだとの感慨を得ました。

また、今回の訪問でもっとも印象に残ったのは、留学している多くの日本人の先生方が、生き生きと活躍されている姿を見ることが出来たことです。

当然英語でのコミュニケーションは必要ですが、それ以上に、日本で習得したカテーテルや心エコーの技術を駆使し、アメリカへの留学、臨床研究に生かしている姿は、今後我々が留学を考慮する上で非常によいモデルだと思います。

まずは、日本で臨床能力、基礎実験の技術等を身につけ、それを武器としてアメリカはじめ海外で経験を積み、また、海外留学で得られた技術や知識を日本に還元することが出来れば理想的ではないかとの思いが芽生えました。もちろん留学は単に医学の研究や研修だけでなく、海外での生活の経験を得ることができます。おそらく多くの外国の人とも友人となり、その国の様々な文化などを経験し、日本を外から見る機会を得ることで視野が広がるでしょう。今回私たちは研修の間にも夜にはミュージカルを観劇したり、最終日には自由の女神や世界貿易トレードセンター跡地も見学しました。ニューヨークの食事は心配していたほどでなく、口に合いました。特にT-boneSteak はボリュームがあり、おいしいと感じました。

初期研修中にローテート中の科の先生方に多大な迷惑をおかけしながら、1週間の海外研修期間をいただき、海外での臨床、研究に触れる機会を作っていただいたことに感謝をいたします。

「百聞は一見にしかず」のことわざ通り、たとえ専門的な知識が乏しかったり、英語が堪能ではなくても、研修医の時期に海外の病院を見ることは非常に刺激的です。滞在は4日間という短い期間ですが、本当に多くの経験をさせていただき、今後への強い動機づけとなった気がします。

また今回の海外研修はコロンビア大学だけでなく、MDアンダーソン癌センターやエモリー大学など複数の施設に多数の研修医が見学に参加しました。見学先施設も自分の興味のある分野を選択しています。循環器に興味のあるものは循環器の新しい治療を見聞し、腫瘍学を3年目以降専門にしたい人は癌センターを肌で感じ、整形外科を志望する人は整形外科の最先端に触れるというものでした。

来年以降もこのプログラムに参加し多くの刺激を受けたいと思っている研修医が多数出ることを期待しています。また、充実した研修生活と、海外の医療を見学したいと思っている学生の皆さん、和歌山医大の研修プログラムはそんな希望にピッタリです。今後も多くの研修医、学生の皆さんが和歌山医大で働き、この海外研修を利用してほしいと思います。

CUMC の建物にかかる垂幕
標語のようです。面白いですね。

ご存じ、自由の女神
NY を見守ります。

久保先生や IVUS labo のみなさん
（CardioVascular Research foundation にて）

復興中のグラウンド・ゼロ
まだまだ傷痕は深いようです。